

知を

英国で空前の規模で実践されたチャリティーの全貌の解明だ。その先には新たな近代英国史観の構築を見える。

阪神淡路大震災が研究生活を変えた。京都大学の学部生時代は英国議会史を研究した。だが、卒業の年に震災が起き、ボランティアの急速な広がり、に衝撃を受けた。国による弱者救済が福祉国家のあるべき姿だという思い込みを突き崩された。

英国チャリティー史



19世紀に英国で行われた孤児院の「投票チャリティー」を描いた絵画。当時は孤児院に誰を入所させるかを寄付者が投票して選んでいた。子の入所を希望する親や支援者がブラカードを掲げて投票を呼び掛けている(ロンドン博物館所蔵、金澤さん著「チャリティーとイギリス近代」所収)

近代英国を俯瞰する「救済、医療、孤児や未亡人の保護、高齢者福祉、初等教育、非行少年の更生」といったあらゆる領域で慈善活動が展開されていた。例えばケンブリッジ大は、中世の貴族らが寄進した土地からあがる地代を何百年にもわたって収入源としてきた。寄付された不動産や債券を平永久的に運用する「信託型」、特定の目的を掲げて篤志協会をつくり寄付を募る「結社型」、落ち穂拾いに代表される「慣習型」など、多様なチャリティーがモザイクのように英国国民の

19世紀に英国で行われた孤児院の「投票チャリティー」を描いた絵画。当時は孤児院に誰を入所させるかを寄付者が投票して選んでいた。子の入所を希望する親や支援者がブラカードを掲げて投票を呼び掛けている(ロンドン博物館所蔵、金澤さん著「チャリティーとイギリス近代」所収)



経営史料で見える

三井文庫と三井記念美術館は同文庫の開設50周年などを記念した特別展「三井の文化と歴史」後期企画として、「日本屈指の経営史料が語る 三井の500年

文化

植民地化の歴史、今もあつれき

イタリアの植民地主義をテーマに母国エリトリアの歴史を語るネガシュ・ウブサラ大名誉教授
(京都市左京区・京都大人文学研究所)



戦後70年に合わせ、第2次世界大戦と脱植民地化について考えるシンポジウムがこのほど、京都市左京区の京都大人文学研究所であった。イタリアの旧植民地エリトリア出身で、スウェーデン・ウブサラ大名誉教授のテケステ・ネガシュ氏が植民地主義に翻弄された母国の歴史について語った。

紅海沿岸にあるエリトリアは1890年にイタリアの植民地となり、1941年にイギリス軍政下に置かれた。その後、隣国エチオピアとの連

京大人文研 エリトリア出身の研究者ら議論

邦制や強制併合を経て、93年に独立。98年に国境紛争が起こり、現在も緊張関係が続く。

ネガシュ氏は、イタリアの植民地主義がエリトリアに経済発展をもたらす一方、植民地兵が近隣地域への侵攻に利用された歴史を説明。イタリアの人種主義政策やイタリア人にエチオピア人に対する優越感を抱かせ、脱植民地化や連邦制の中でも政治家や活動家に独立を促したとの見方を示した。「植民者に植え付けられた神話がエリトリアとエチオピアのあつれきを生

伊が植え付けた神話、独立闘争の基盤に

み、長年の独立闘争の基盤を作った。それが今の国境紛争の問題につながっている」と植民地主義の暴力性と現代に及ぶ負の影響を解説した。

イタリアがエリトリアに戦後賠償などを行っていない現状にも言及し、「イタリアでは、植民地支配はムソッリーニ時代の産物と捉えられ、エリトリアの歴史は忘れ去られている」と述べた。

日本国内にはイタリアの植民地研究の専門家がほとんどいないため、ネガシュ氏の報告を受け、日本やドイツなどの植民地主義に詳しい研究者ら

らが議論を深めた。東アジア関係史が専門の水野直樹・京都大教授は「英仏に比べ、イタリアも日本も後発の植民地主義で、ほぼ同時期に植民地の支配や侵攻を行うなど共通点がある」と分析。1896年のアドワの戦いでエチオピアに敗れたイタリアが約40年後に雪辱を期し、エリトリア兵を利用して侵攻したことを例に、「日本が、過去に日本人が多く血を流したから満州を支配する権利がある」と考えたように、歴史の記憶が侵略の原動力になる」と指摘した。(佐久間卓也)